

企画・発行・編集 ■ 災害ボランティアぐんま
災害ボランティアぐんま事務局
〒371-8570 前橋市大手町1-1-1
Tel 027-226-2290 Fax 027-221-0300
URL : <http://www12.wind.ne.jp/saivol/>

東北地方の三陸沖を中心とするマグニチュード9.0（震源域・南北450^{km}、東西150^{km}）の巨大な東日本大震災は、2011年3月11日午後2時46分に発生。岩手、宮城、福島3県の太平洋岸で津波による死者・行方不明を中心に1都9県で約1万9千人が犠牲となった。また、被災した東京電力福島第一原発で爆発が起き、高濃度放射能が飛散。さらに炉心溶融も確認されて、レベル7の深刻な事態から周辺住民の避難や、拡散された放射性物質が本県の一部農産物からも検出される影響が出た。

県内では桐生で震度6弱を記録したが、発生直後から保存食や水、毛布、衣類など280トンの救援物資が集まったほか、多額の義援金が被災地に届けられた。このほか、原発事故で放射能の汚染が心配された避難者もピーク時には3千7百人余りを受け入れた。

「東民ボランティア」で、各班のリーダーとして23人が参加（4〜5月）。バス内などでの宿泊という厳しい状況

復旧、支援で懸命に活動



高橋気象台長が講演

平成23年度総会

平成23年度総会は5月14日、県庁で開かれ、22年度事業報告と収支報告、23年度の事業計画、収支予算をそれぞれ承認。また、役員改選では四方浩会長、児玉三郎理事長の再任、片田敏孝理事（群馬大学大学院教授）の副理事長就任を決めたほか、辞退を申し出た4人を除く理事の再任が承認可決された。任期は23、24年度の2年間。

続いて前橋地方気象台長・高橋清利氏が『群馬県自然災害』と題して記念講演。浅間、草津白根に代表される火山は、観光資源とともに災害の危険性もある」と、噴火や地震、豪雨など自然災害の脅威を解説。地滑り、土石流、泥流など大雨による洪水によって発生する災害への注意も喚起。さらに予測されている東海、東南海、南海の地震については、過去に例もあり連動する可能性もあり警戒が必要と述べた。

人生を見つめ直す機会に

廣橋 善一(棟東村)

【5月15日～17日】

想像もできない巨大な津波を受けた被災地で、何か役立つことができればと参加した。以下は、人生を見つめ直す機会ともなった報告。

朝6時、JR新前橋西口を出発。福島を過ぎて東北道は80km/hの速度規制。橋などで段差があり、バスは前後に大きく揺れて仮眠もできない。正午、石巻専修大学内の石巻市災害ボランティアセンターに到着。現地ボランティアコーディネーターと活動内容を確認後、バス内で昼食をとる。午後1時半、バスで大街道小近くに向かう。被災者宅は5人家族で庭の泥、物置の廃棄雑誌などを一輪車で公道待機の運搬車で運ぶ。ヘド口の悪臭が強い。2時間後、作業終了。40代の家主から一階は水没、二階の屋根に上がって助かったと聞く。夜は参加者有志数人とテント内で懇談。翌朝4時、約5km歩いて漁港まで現実とは思えない被災光景を見に行く。7時、食事の準備と昼食づくり。8時バスで移動。側溝の水は詰まっていた。昨日近くで広大な敷地の自治会役員宅(一階はすべて水没と畑に、事務局を含め参加者22人と個人参加の7人が昼食時間(一時間半)を除いて午後4時まで海砂、古紙、黒色ヘド口、粘土性泥の四層の泥出し作業にあたる。

数日前から土建会社の8人が重機二台、ダンプ二台で作業していたが、製紙工場からの古紙流出によるヘド口の集積に手間取っていた。庭木も雑草も

塩水で枯れていた。夕方5時、テント内での食事準備中、仲間一人が強風で沸かした湯を足にかけて火傷をするアクシデント。救急車で病院へ。経過観察で「泊まり」となった。

3日目も4時起床。大学構内を散歩して一緒に参加者と意見交換。8時バス出発、途中から徒歩で15分かけて被災者宅へ。男8人、女2人で家具のばらし、押入れ、仏壇の片付けを家主に確認しながら作業した。トイレは歩いて10分余の小学校。11時40分終了、バスで初めて手作りむすびを食べる。

「現場で感じたこと」持参の装備品、宿泊方法、自己紹介、コーディネーター間の引継ぎ、活動の継続など沢山あったが、どうすれば役立つのか自問自答しながら作業しました。

テント持参して良かった

石田 栄(高崎市)

【4月20日～22日】

降雪もあり、朝晩は冷え込んだが、装備を揃えていたので大丈夫だった。現地の様子が分からず、個人の荷物が多かったが、水の確保だけでもやってもらえればありがたかった。バス泊の人が多かったが、体力の回復を考えると、持参したテントで体を伸ばせて快適だった。初日は午後、3日目は午前だけ、作業効率から3泊4日が良いかな?

指導のサポート役が必要

飯塚 淳子(前橋市)

【4月22日～24日】

県民から募つてのボランティア活動なので、派遣前にオリエンテーション

を行うべきだった。現地で「どうすればよいのか?」「それではわからない」と言つた発言や、指示待ちの光景が見られた。また、被災地を携帯カメラで撮影、サービスイリアでのゴミ廃棄も見つけられた。現地で経験あるサポート役の会員も必要ではないか。

効率的な活動できた

小野澤俊一(藤岡市)

【4月24日～26日】

がれきの処理、家屋の清掃などした。昼食時の降雨で30分待機して雨上がり後に続行したり、交通渋滞を避けるため参加者の総意により6時半出発で活動したり、効率的にやれた。被災者の気持ちに尊重した支援活動が達成できたと思う。切り傷に備えて破傷風の予防ワクチン接種の呼びかけの配慮も考慮して、またの参加に備えている。

できる範囲でやれば良い

今井 賢治(高崎市)

【4月26日～28日】

派遣方法は良かったと思う。コンビニも営業していたし、水も使えた。泥かき作業を20人一緒に移動だったが、でしゃばらないで出来る範囲でやればよい。3泊でも良かったかな。

連帯感もって活動できた

泉田 忠晴(前橋市)

【4月26日～28日】

個人で行くにはいろいろ出費も掛かるし心細い。継続してバスを仕立てて行けるようにして欲しい。バス内での宿泊でいびきの迷惑をかけたので、テ

ントを購入して次回に備えている。現地はまだボランティアが不足しているし、やることはたくさんあると思う。連帯感をもって活動できた。

募集で資格、要綱の明示も

堀越 泰久(高崎市)

【5月11日～13日】

総会で参加希望者から不満の意見があったが、募集に際して装備所有の有無や年齢制限など明示すべき。大人数と小規模で違うが、事務局が会員の持病も含め個人情報、装備品を掌握していれば、スムーズに派遣できる。また、今回の参加者を核としたリーダーの育成と選任など、組織の強化、連帯感の育成もやって欲しい。

事前の情報をもつと

砂賀美絵子(桐生市)

【5月13日～15日】

自主的なボランティア参加は初めて。同じ班の方々など、大変お世話になった。疲れを考えると、バス泊はきつい。2日目は夜はテントを貸して頂いたが、事前に情報やアドバイスを聞いていれば、よりよい状態で活動できたと思う。

普段の実地訓練も必要

木嶋 政一(渋川市)

【5月13日～15日】

個人で4月に2泊3日で石巻に行き、民家の家具の片付け、ヘド口出しをやった。慣れている人も多くて臨機応変でフットワークも良かったが、主催ではバスの用意で費用が非常に少なく、県民同士で連帯感もあつてス

レンタカー利用で支援活動

各地からの若者と汗流す

星 雄二(高崎市)

〔7月19日～21日〕

最初の2日間は、発生から4か月余り経過しているのに水田には漂着物が散乱したままの仙台市宮城野区で援農作業と、ポラセンでのバス、支援車の清掃。3日目は亘理町の民家の床を剥がして泥かき。いずれも各地から集まった若い人と一緒に、女性一人の参加も。遠隔地ナンバーの車も多く、広場にはテントも目立ち、心を動かされた。

経験を無駄なく実践する

細金 義光(太田市)

〔7月19日～21日〕

被災地入りは県民ボランティアなど4回目だった。仙台ポラセンはまもなく閉鎖とかで作業も落穂拾いのだった。まだ床下のかき出しをしている所も。田んぼの滞留物も行政任せだった。ポラセンが関わったり。「マニュアルあつて、マニュアルなし」の意味がよく分かった。以前の研修で「災害ボラの登録は役に立たない」と聞いて理解できなかったが、今回の自主参加で、待つては何も動けない事だと分かった。この経験を無駄にしないで無理なく実践し、語り継いでいきたい。

少しの努力で役立った

木内 俊三(前橋市)

〔7月19日～21日〕

県民ボランティアで4月と5月に石巻に行った。同行者に若者が多く、女性とも声を掛け合い、呼吸を合わせて

できた。作業着の悪臭でバスでの宿泊はきつく、私は2泊3日が限度。

レンタカーでの2日間は仙台市内。津波にあつた畑の除草作業。家屋や倒木、舟などは片付けていたが、小物類は散乱したまま。草刈用の刃物は錆びていた。拾い集められたビニールハウスの金具も洗ったが、使用できない部品も。資源の大切さと必要さを痛感した。3日目は亘理町での床下剥がしと清掃。被災された家族は「再建はいつになるやら」と言っていたが、あせらず少しずつ元氣を出して欲しいと願った。

周囲に経験を伝えたい

見野恵美子(高崎市)

〔7月26日～28日〕

初日は仙台郊外で二班に別れて寺の泥だしと農家での草取り。2日目は降雨で石巻での写真洗浄。3日目は仙台で津波被害を受けた農業ハウスの解体撤去と周辺の畑の草刈。体力が必要な場所もあつたが選別できた。自分たちで車を運転。場所も当日、受付で確認して現場に向かつたが、カーナビは万能でなく渋滞もあり、チームワークの良さや臨機応変で活動できた。今回の経験を周りの人に伝えたい。

現地を絶対見捨てない

森 優子(高崎市)

〔7月26日～28日〕

石巻での県民ボランティアで4月、5月に行ったが、現地では日時の経過とともにニーズが変化していた。津波で流されたアルバムから写真や手紙を剥がしてバクテリアに侵食された部分を刷毛で洗い落とし乾かす作業も

やつた。整理の終わった展示室で、訪れた被災者が「あつー」と手にする姿を目にして、まだ持ち主が現れない写真やランドセルに胸が詰まる思いだった。同時に必要とされる人手がまだまだ足りないことを実感。世代や体力に依りて現地に立ち、絶対に見捨てない姿勢を継続することが大切と感じた。

できることを会得した

阿部 孝(前橋市)

〔7月26日～28日〕

大震災発生後、役に立つことができればと、年齢、体力を考えて県内の支援物資の移送や受付などをやってきた。しかし、報道で悲惨な状況を見聞きして参加した。現地に近づくにつれ気持ちが高揚。未だ家屋は破壊されたまま、田んぼには車や樹木、散乱している光景を目の当たりにすると身震いを覚えた。港町・石巻の繁華街はまだ想像を絶する壊滅状態。現地で活動できた充実感と、今後自分で出来る事を会得できたのが大きな収穫だった。

被災者目線で活動できた

千明 久子(渋川市)

〔7月26日～28日〕

天候に恵まれず雨に振り回されたが、被災者たちに寄り添い、目線で考える事ができた。また各地からのボランティアの方々の様々な思いにふれることも。災害ポラセンでの感想は、被災者の自立支援を視野に入れたニーズの受け入れ方をしないと、「災害」の終わりが見えて来ないのだな、と感じた。有意義な3日間でした。

ムーズに活動できた。本場に必要な救援、支援を今後もやってもらいたい。普段の実地研修も必要だ。

永続支援で負担求めても

石井 竹則(藤岡市)

〔4月26日～28日、5月15日～17日〕

行程は2泊3日がベスト。永続的な支援活動のため参加者に金銭的な負担を求めることも。また作業を円滑に行うために指揮者を明確にして、作業終了後には反省会を開くなど、初日の現地へ向かうバス車内ではつきりさせる必要性を感じた。

きつい作業だった

須田 愛子(みどり市)

〔4月24日～26日、5月15日～17日〕

長距離をバスで移動するなど、体力や持物(寝袋、毛布、着替え、食料)を考えると、2泊3日が適当だった。道路がヘドロの泥沼、側溝を埋めるがれき、民家床下の泥だし、きつい作業だった。4月は飲むだけでなく、手を洗う水もなくて辛かったが、5月は活動現場近くにタンクが設置されていた。

若い人の参加を期待

鬼形 武明(吉岡町)

〔4月22日～24日、5月13日～15日〕

泥出しなど肉体労働は若い人向き。もつと参加してもらいたい。気になったのは、同行の県職員。素人？なのか、現地のコーディネーター任せで、持参していたはずの装備品の引継ぎもない。せめてコミュニケーションを図る努力はして欲しかった。

被災者への想いを語り合う

12旅団・武藤氏の報告も

東日本大震災に対する災害ボランティア活動報告会を11月26日、県庁で開催。被災地での活動で感じた出来事や課題などを会員ら41人が語り合った。

報告会はまず、福島県内で4か月間余り活動した陸上自衛隊12旅団の副旅団長兼相馬原駐屯地司令・武藤正美一等陸佐が「大規模災害においてシナジー効果を発揮するために」と題して講演。震災直後に原発周辺の病院やケアホームなどから患者、自力歩行困難者2千人余りの避難支援。次いで原発での負傷者の救出など、想定してない手探り状態の中での活動を写真で見ながら説明した。また、当初1万人以上が避難を拒否した原発20^キ圏内住民の説得や誘導支援、津波によるがれきの



中での行方不明者の捜索での苦労話も披露した。

国が対処すべき①災害②事故③事件④主権侵害といった予期しない事態への危機には、各種各団体が相乗効果を発揮できるように日ごろから訓練するなど、準備することが大切と強調した。

報告会では、大震災や新潟水害へのボランティア参加者が、活動した場所や内容、そこで経験した事などを次々に話し、改めて被災者への想いを分けた。

懸命に傷病者運ぶ

東京での防災訓練

東京都と小平など四市合同の総合防災訓練が10月29日、都立小金井公園で実施され、会員10人が参加した。

東日本大震災で活躍した警察や消防、自衛隊の救出、救助の機器や大型車両が展示される中で行われた傷病者搬送訓練で会員たちは、トリアージが終わった負傷者を担架で離れたテント内に次々に搬送。事前に訓練内容が知らされない中で、緊迫感を持って汗を拭きながら体験していた。

訓練終了後は隣接の江戸東京たてもとの園で昼食。その後、施設内の昔懐かしい建物を見て回った。



ボラセン設置で役割

高崎で県総合防災訓練

23年度県総合防災訓練は9月10日、高崎市のJR操車場跡地で実施され、会員、事務局員20人が参加した。今年も直下型地震の発生で多数の建物倒壊、土砂崩落、火災などが発生して、多くの負傷者が出たほか、電気や水道、ガス、電話のライフライン施設に大きな被害が発生したと想定。被災者の救出、救助、ライフラインの応急復旧、住民の避難訓練などが行われた。

会員はボランティア受け入れ訓練に加わり、家屋内外に散乱した物の分別、清掃、泥だしなどの活動に、鈴木孝尚さんの指揮のもと、ときばきと対応していた。

活動の説明や新会員勧誘も

県危機管理フェア

防災への関心を高めてもらうと、12年1月20、21の両日、県庁で危機管理フェアが開かれ、訪れた見学者に会員18人が4班に分かれて災害でのボランティア活動を説明した。

会場には警察や消防、自衛隊、気象台などが災害時に使う救命器具や活動ぶりを紹介する写真などが展示された。また、建物や車の中に閉じ込められた人を救出する器具の操作を体験する県警のコーナー隣では、会員たちが東日本大震災の経験談を話し、その場で新たに会員登録する人もいた。

編集後記

大震災の発生から一年経った。新聞、テレビでは津波で壊滅的な被害を受けた海沿いの街の現状を伝え、また国の復旧、復興に対する取り組みなどを検証していた。何処もまだ緒についたばかりだが、心痛めたのは高齢者や障害のある人たちの「明日」。どうしたら強い意欲を持ってもらえるか考え込んだ。深刻なのは原発による放射能の影響。避難者の帰郷だけでなく、農作物の安全性に対する不安も根強い。

今号は被災地での活動報告を特集した。今後に生かしていただければ、と思う。同じ声が多くて掲載できなかった全員の皆さんにはお詫びしたい。(M)